

水かさいと多くて巾一間ばかりの谷の小川につ
きたり。水音いと高く、小川の流いとも清くて、
心もすむあたりなり。さて楓樹はこのあたりにも
多くて、晝なほ暗さばかりなるが、瀧つぼの上
枝さしねはひ谷川にかけのうつるなど、瀧の水と
紅葉と親しげなるいとめでたし。

一とせの夏、朝とくより一日のあつさをこの瀧に
さけたることあり、谷川はいと浅ければ、もすそ
かゝげてかちわたりし、瀧見堂といふにのぼる。
此堂は、前には瀧つぼあり、後には楓樹茂りて、
風いと涼しくはだへ冷なるまでにて夏を知らぬと
ころになん。けに夏は瀧のはとりこそ、住むべ
かりけれ、とぞ思ひし
なるたきといふ名はなどてつきたる、其音物の鳴
るに似たればにや、人は秋のみ來れども、われは

夏こそ と思はるれば、なつたきとやいはまし、
と友の一人にいひつるに、ふつゝかなる名にもあ
るかな、と笑はれたりき

こよひあまりにあつくてたへがたければ、涼しき
こと思はんとするに、たちまち心にかびたるは
この瀧のことなり。文のよしあしをも思はで谷川
の如くはしりがくに、なにとなく涼しき風吹き來
るこゝちして身は瀧見堂にいゐるがごとし。

墓まうで

愛 子

けふは父君にわかれまつりてより、三とせ過し日
也。母君とともに御寺にものしつゝ、やがて父君
の御墓をおろかみまつらむとてゆく。そここゝい
と草ふかうわけかたかるに、こなたに一すちの道

あれば、そこよりゆくに、其わたりいさゝかのちりもなく、草さへ皆かりつくしたり。しきびの葉をさしけなとしつゝ、母のうしろへにありてひざまづきして、あやしくもはふり落るなみだの露のといめかたくて、人のみとがめやせんと、かつはやさしけれどかひなし。母君も目にこそ露はもちたまはね、御ころのうちには同じなげきにかさくれたまうらむと、おもひやりまつるだにおのれの心ははりさけぬべし。御堂にのぼればやがてかねの音のひびけるなかより、しつかによみいでし御經の聲尊としとも尊とし。つゝしみてきくうちにもなき父のこのみむねにうがひつゝ、せめていさゝでもこのよにおはしまさばなどもおもふかりしもふと耳に入りたるは

「凡はかなきものはこの世の始中終まほろしの如

くなる一期也。さればいまだ万歳の人身を受けたりといふことをさかず、一生すぎ安し、いまにいたりて誰かをもとせの形骸をたもつべしや」とよみすみ聲也。げにげに今さらになげきかなしむともかひなきことよとしづかにおもひかへしつゝ、うらみ多きわだし秋の風に吹おくられて我やにぞむかふ。

水うてや

蟬も雀も

濡れるほど